

研究ノート

南フランス・ドローム県北部の中世ロマネスク聖堂（1）

中川 久嗣*

本稿では、南フランス・ドローム県の北部に点在する中世ロマネスク聖堂について、可能な限り知りうるものすべてについて、実地に行った訪問調査の結果を交えて考察・検討を加える。具体的には、アルボン（Albon）とその周辺からル・グラン=セールなどイゼール県境にかけての地域、そしてシャントメルル=レ=ブレ（Chantemerle-les-Blés）とその周辺のコミューンにあるロマネスク聖堂を対象とする。ドローム県は、ローヌ川の中流東側に位置し、ローヌからグルノーブルを経てスイス方面に向かう交通路の起点である。ディーを経由するとオート=アルプ県を経て、やはりフレンチ・アルプスに向かう交通路の分岐点となる。古くはポエニ戦争の際、紀元前218年にカルタゴのハンニバルが象を引き連れてアルプス越えにかかったのも、ちょうどこのあたりであったのではないかと考えられている。この地域は、11世紀～12世紀にはアルボンに拠点を置いていたアルボン伯のギーグ一族（Les Guigues）が支配していた。初代はギーグ1世ル・ヴュー（Guigues Ier le Vieux d'Albon, 1000?-1070）で、1023年にブルグント国王ルドルフ3世からこの地を与えられた。その後1032年にルドルフ3世が死んだことによりブルグント王国が神聖ローマ帝国に組み入れられ、アルボン伯領も帝国の一部となった。ギーグ3世（1055?-1133?）の頃から正式に「アルボン伯」を名乗るが、ギーグ4世（1090?-1142）が「ドファン」（Dauphin）の称号を使い始め（紋章はイルカ）、次のギーグ5世（1125?-1162）の時代にはその称号は「ドファン・ドゥ・ヴィエノワ」（Dauphin de Viennois）に変わった。この頃にはアルボン（ギーグ）一族は拠点をグルノーブルに移し、現在のイゼール県、オート=アルプ県とともに広大なドフィネ地方（Le Dauphiné）を支配するようになっていた。しかし1349年に最後の「ドファン・ドゥ・ヴィエノワ」となったアンベール2世（Humbert II, 1312?-1355）が、跡継ぎがいなかつたこともあって、ドフィネの領有権

* 東海大学文学部ヨーロッパ文明学科

をフランス国王フィリップ6世に売却した（アンベール2世は、1355年に42歳でクレルモン=フェランのドミニコ会修道院において没している）。こうしてドフィネはフランス王国に併合されたのであるが、歴代のフランス王太子もドフィネの領主として「ドファン」（Dauphin）を名乗ることになった（ただし王太子として実際にドフィネに長く滞在したのはルイ11世だけである）。これは以後18世紀のフランス革命まで続くが、革命ののちドフィネ州はドローム、イゼール、オート=アルプの3つの県に分割されて今日に至っている。

ドローム県は、リヨンからローヌ川沿いに南仏プロヴァンスに至るちょうど中ほどに位置する。特に南部は「ドローム・プロヴァンサール」（Drôme Provençal）と呼ばれることがあるように、気候的にはすでに地中海性気候の圏域で、文化的にもプロヴァンスの色彩が濃い地域である。例えば冬などにパリから鉄道でプロヴァンスへ向かうとき、リヨンあたりまでは雨や曇天といった不順な天候であっても、ドローム県に入つてヴァランスを通過するあたりから青空が広がり始め、車窓には糸杉の列と家々のピンク色の壁が目に入るようになる。モンテリマールを過ぎて東側の丘の上にラ・ガルド=アデマールの聖堂の尖頭が見えると、そこはもう南仏プロヴァンスである。

建築的には、この地方の聖堂はいくつかの例外を除いて、概して小規模～中規模で、多少とも後の時代の改修・改築の手が加えられているものが多く、単身廊形式、南北に付けられた小さめの祭室、内陣の上に立つ方形の鐘楼（鐘塔）、半円形の後陣、時おり多弁形アーチとともにアーキヴォルトが架かる西ファサードのポルタリュ、などといった特徴が見られる。また聖堂内部のピア柱や横断アーチを受ける円柱の柱頭彫刻にもローヌ地方の特徴的な（しばしばアルカイックな）様式が見られる。

本稿で取り扱う聖堂は、「ロマネスク期」とは言っても厳密な時代の限定はせず、11～12世紀のいわゆる盛期の「ロマネスク」期を中心として、その前後の時代もゆるやかに含めたものである。聖堂全体がロマネスク期のものから、大なり小なり一部分その時代のものが残っているもの、建築様式がロマネスク様式をとどめているもの、そして現在では遺構となっているものなども含まれる。

聖堂の配列は、便宜的にドロームの県番号（26）、大まかな地域、そして自治体（Commune）の順で番号を付した。ここで言う「大まかな地域」は、行政区画の「郡」（arrondissement）や「小郡」（canton）には対応してはいない。また同一のコミューンに複数の聖堂がある場合は、「a. b. c. d.」というようにアルファベットで区分した。

聖堂は、本文中で建築物としてのそれを指す場合はそのまま「聖堂」とし、個別的名称としては「教会」を用いた。個々の地名や聖堂の名称については、現地の慣用の

ものを採用した。

採りあげる聖堂は、基本的にすべて筆者が直接訪問・調査したものである。写真画像も筆者の撮影による。誌面の都合ですべての聖堂の写真画像をここに掲載することはできない。それらは筆者開設のウェブページ (<http://nn-provence.com>) で閲覧可能である。

26.1 アルボンからロマン=シュル=イゼール周辺まで

26.1.1a. アルボン／トゥール・ダルボンの城塞礼拝堂

(Chapelle castrale de la Tour d'Albon, Albon) 遺構

国道 N7 を、ドローム・イゼール県境から南へ約 7 キロで東に折れ、県道 D122A をさらに 2 キロほど進むとアルボンの村に至る。この地は、517 年にヴィエンヌ大司教アヴィトゥス (Avitus/Saint-Avit) によってブルグント王国の司教たちを集めてエパオ教会会議 (concile d'Epaone/Epao) が開かれた場所であったとも考えられている。ただしそれは今日のアルボンのコミューンの中心地区であるサン=ローマン=ダルボン (Sain-Romain-d'Albon/トゥール・ダルボンの西およそ 1.5 キロ) である。ここでは 19 世紀半ばの発掘調査によって、このコミューン北端部にある現在の墓地にあたる場所において、初期キリスト教時代 (5~7 世紀頃) のサン=ローマン・バジリカ墓地聖堂の土台部分の遺構が見つかっている。後陣は東を向き、東西の長さの短い单身廊形式で、この聖堂の南側には墓地があった。このバジリカ聖堂は 10 世紀頃まで存続していたようであるが、その後消滅した。

トゥール・ダルボン (アルボンの塔) は、さらにそこから東に 1 キロにある小丘の上に建っている。ヨーロッパではおよそ 10 世紀頃から、しばしば「モット・アンド・ベリー」 (Motte and Bailey) として知られる築城方式で城塞が造られたが、これは塔や城塞本体が築かれる「モット」と呼ばれる小丘と、このモットに併設された「ベリー」と呼ばれる囲い地を組み合わせたもので、ここアルボンの塔は、その「モット」とその上に建つ塔が残された典型的な築城例である。この地は、後にドファン・ドウ・ヴィエノワ (Dauphin de Viennois) となってドフィネを支配することになるアルボン伯 (comte d'Albon) 一族の最初の拠点となった場所である。彼らはもともとは現在のアルデッシュ県のヴィオン (Vion) の領主であったとも言われるが、正確なところはよく分かっていない。モットの上に塔が建つアルボンの城塞が史料に現れるのは 11

世紀のことである。この塔は、およそ 7 メートル四方の方形のもので、高さは約 15 メートル、壁の厚さは 1.6 メートルである。もともとは木造であったが、12 世紀～13 世紀初め頃に石造の塔（ドンジョン）に建てかえられたものと思われる。

城塞礼拝堂の遺構は、この塔のすぐ北側にあってモットの足下の発掘現場で見ることができる。東を向いた半円形の後陣部から比較的幅の狭い身廊が、塔の西側にある城塞居館の遺構の北東端まで細長く続くが、これもいくつかの時代の変遷を経たものである。9 世紀には石造りの小さな礼拝堂があったが、11 世紀の終わりから 12 世紀初め頃に、身廊と後陣が東へ拡張され、ロマネスク様式で装飾された。聖堂を飾っていたと思われる彫刻の断片が発掘によって見つかっている。13 世紀以降、後陣部をさらに東へと延ばし改築された模様である。現在見ることができる遺構の東端の半円形後陣の土台部分は、この 13 世紀のものである。

2013 年からの修復・整備工事によって、ここを訪れる見学者のための駐車場と、塔を囲む形での見学用の階段状テラスが新たに設けられた。

Bois et Burgard (2007) pp.14-15.; Bornecque (2002) pp.4-5.; Da Costa (2000a) pp.54-56.; De Corcelles et Boudon (1992) pp.157-172.; Dreyfus (1976) pp.52-58.; Duval et al. (1995) pp.224-226.; Mazard (1999) pp.7-16.; Planchon et al. (2010) pp.141-146.; Vaillant (1973) pp.113-137.; RIP.

26.1.1b. アルボン／サン=フィリベル教会 (Église Saint-Philibert, Albon)

サン=ローマン=ダルボンから高速道路 (A7) 沿い南に向かう小道をおよそ 3 キロ。聖堂と同名のサン=フィリベルの小集落の奥にあり、すぐそばを高速道路が走っている。もとはブルゴーニュのトゥルニュ (Tournus) の修道院が所有する小修道院の付属聖堂であり、史料の初出は 1119 年である。14 世紀までは数多くの巡礼がここを訪れていたという。宗教戦争の時代には 1562 年にプロテスタント側であったアドレ男爵 フランソワ・ドウ・ボーモン (François de Beaumont, baron des Adrets) によって攻撃された。フランソワ・ドウ・ボーモンはこの時、ローヌ川沿いのあちこちで略奪を行い、同じ年にヴァルレアスも被害を受けている。



26.1.1b. Saint-Philibert d'Albon

サン=フィリベル教会は14世紀（または13世紀）以来、かなり改築・増築の手が加えられてきた。12世紀のロマネスク時代のものとして今に残るのは、聖堂の西ファサードおよびそこから東に2ベイの身廊部分のみである。もともとの半円形後陣は14世紀に取り壊されて、東に身廊が延ばされることによって現在のゴシック様式の五角形の後陣が作られた。この後陣には扶壁を介して3面にやはりゴシック様式の窓が開けられている。聖堂内部において身廊と後陣は、尖頭形の凱旋アーチによって隔てられている（そのアーチには彩色された植物模様が描かれている）。17世紀には身廊南側に半円形の大アーチを介して礼拝室（chapelle Notre-Dame-de-Pitié）が増築され、さらに19世紀になってその東側に聖具室が付け加えられた。身廊の天井は、もとは半円筒形のトンネル・ヴォールトであったと思われるが、現在は木製のものになっている。ロマネスク期の雰囲気が色濃く残るのは聖堂の西ファサードである。ポルタイユのすぐ外側には、彫刻装飾（かなり摩耗している）の付けられた円柱の上に半円形のヴシュールが架かるが、このヴシュールには古代風の花柄彫刻が施されている（1つのブロックに花弁が1つずつ彫刻されている）。そのヴシュールをなぞるように、さらに外側に半円形のヴシュール（19世紀のもの）が重ねられて、アーキヴォルト全体が構成されている。このポルタイユは1869年に修復されたものである。

Barruol (1992) p.231.; Ferrier et al. (1989) p.23.; La Sauvegarde de l'Art Français-Cahier 07-1994, p.50.; RIP.

26.1.2. アネロン／ノートル=ダム教会（Église Notre-Dame, Anneyron）

アルボンからおよそ6キロ北東に位置する。国道N7のLe Creux de la Tineから県道D1を約7キロ東に進む。ノートル=ダム教会はアネロンのコミューンの南端に建っている。建設は12世紀後半（または前半）であるが、史料の初出は1276年である。アネロン自体はアルボン教区に属したが、聖堂はヴィエンヌのサン=ピエール修道院傘下の小修道院のものとして建てられた。16世紀には、ドロームの他の多くの聖堂と同じく、アドレ男爵フランソワ・ドゥ・ボーモンの部隊の攻撃によって被害を受けている。聖堂の身廊部と西ファサード、そして鐘楼は19世紀（身廊は1845以降、鐘楼は1875年）のものである。ファサードと鐘楼とともに、赤いレンガの帯と丸い石の層が交互に積み重ねられている。ポルタイユは左右にそれぞれ2本の小円柱が並び、その上に2重のヴシュールからなるアーキヴォルトが架かる。タンパンは無装飾である。ロマネスク期の部分は、後陣とその両側に並ぶ小後陣、そして内陣部とその上に載る方

形のクーポールである（かつてはこのクーポールの上に鐘楼が立っていた）。内陣のすぐ西側には 19 世紀のトランセプトがある。祭壇の置かれた内陣の南北の翼廊を、ロマネスク期のトランセプトと見ることも可能である。主後陣は半円形プランで、外側は壁面の途中の高さまで付けられた扶壁の間に半円頭形の窓が 3 つ開く。コーニスには単純に彫刻されたモディイヨンが並んでいる。主後陣をはさむ左右の半円形小後陣にも半円頭形の小さな窓が 1 つずつ開いている。

聖堂内部は、19 世紀の身廊部分が白く上塗りされているのに対して、ロマネスク期の後陣部分はもともとの壁面がそのまま残されている。凱旋アーチとロマネスク期のトランセプトが開く南北両側のアーチは、わずかに尖頭形である。この交差部の 4 隅のピア柱に付けられたコリント様式の円柱の柱頭彫刻は、ぶどうのツルや古代風のアカンサス、そしてその上に足を開いて腰掛ける人物たちであるが、交差部の北東角の柱頭彫刻は、ライオンの上に馬乗りになり、その口をつかんで大きくこじ開けるサムソンである。これらの柱頭彫刻の様式には、ヴィエンヌの Saint-André-le-Bas 教会の影響が見られると言われる。交差部の上には、その四角形の 4 隅に花弁彫刻の付けられたトロンプがあり、さらその上に八角形のクーポールが載る。

後陣内部は、基壇の上にコーニスが延び、その上に内部に向けて大きく隅切りされた半円頭形の窓が 3 つ開く。ユニークなのは、その窓の間にあって、窓の半円頭アーチを受ける柱の仕様である。植物文様の柱頭彫刻が施され、さらに縦溝の彫られた古代風の方形のピラストル（壁付き柱）を、同じように小さな柱頭彫刻の付いた繊細な細い小円柱が、冠板を共有する形で左右両側からはさんで立っているのである。主後陣の上には半ドーム（cul-de-four）が架かるが、この半ドームには、かなり傷んではいるが、17~18 世紀頃のフレスコ画が残されている。中央にはキリスト、その左右の丸いメダイヨンの中には、この教区の守護聖人であるサン=ローラン（3 世紀の人物）と、名前不詳の司教がそれぞれ描かれている。

Barruol (1992) pp.231-232.; Desaye et Peyrard et al. (1976) p.100.; Ferrier et al. (1989) p.24.; GV.; RIP.



26.1.2. サムソンとライオン

26.1.3. サン=ソルラン=アン=ヴァロワール／サン=サテュルナン教会

(*Église Saint-Saturnin, Saint-Sorlin-en-Valloire*)

アネロンから県道 D1 をさらに約 5 キロ。サン=サテュルナン教会は、サン=ソルラン=アン=ヴァロワールのコミューンのほぼ中央の、県道 D1 沿いに建っている。アルボンのサン=フィリベル教会 [26.1.1b.] と同じく、トゥルニュのサン=フィリベル修道院に付属する小修道院付属聖堂であった。最初の建設は 12 世紀前半にまでさかのぼるが、現在の建物は大部分が 19 世紀（1848 年）に老朽化のために再建されたものである。聖堂の平面プランは、長めの身廊の東に半円形の大きな後陣があり、南北にはやはり半円形のトランセプトが作られていて、あたかも三つ葉型のような構成をなしている。また後陣の南側に大きくて飾り気のない方形の鐘塔が立つ。この鐘塔の東側の下部に、地面から少し隠れるようにして小さな小後陣があるが、これが 12 世紀の建物の名残である。聖堂内部は、身廊から主後陣まできれいに白く上塗りされていて、天井は扁平形の楕円アーチである。ロマネスク期の小後陣は、主後陣南側の扉あるいは外から階段を降りたところの方形の鐘塔の下に作られた扉から入るようになっているが、通常は閉鎖されている。その小後陣には、内部に向けて隅切りされた尖頭形の細長いロマネスク様式の開口部と、それよりもう少し幅の広い開口部の 2 つが開いている。天井には半ドームが架かるが、中世期のフレスコ画の一部が残っている。またやはりロマネスク期の石造祭壇も残されている。

Barruol (1992) p.245.; *RIP.*

26.1.4. マント／サン=ピエール小修道院付属教会

(*Église Saint-Pierre, Prieuré de Manthes*)

マントのコミューンは、サン=ソルラン=アン=ヴァロワールから県道 D139 を東へ約 5 キロ、イゼールまでおよそ 3 キロである。小修道院とサン=ピエール教会（あるいはサン=ピエール・エ・サン=ポール教会）は、県道から南に折れて村を見下ろす小高い丘に登る。この小修道院は、もとは 11 世紀終わり頃にクリュニー修道院の傘下としてベネディクト会修道士によって創建された。現在の聖堂は大部分が 19 世紀になって改修されている。西ファサードに開くポルタイユには二重のヴシュールからなるアーキヴォルトが架かる。そのヴシュールは左右でそれぞれ 2 本ずつの細長い小円柱が受ける。その小円柱は石積みの基壇の上に載り、植物文様の柱頭彫刻を持つ（古いものではない）。ポルタイユの上には中心軸から少しだけ左側にずれたところに半

円頭形の窓が開き、その左右に人間の頭の彫刻が埋め込まれている。向かって左側には1つ、右側にはT字状の枠の左右に2つの顔が並んでいる。後者の2つの顔は、それぞれ細長いヒゲを左右にのばしている。これらの彫刻は、ロマネスク期あるいはそれ以前のものが19世紀の改修の際に転用されてこの場所に埋め込まれたものであると思われる。身廊外部の南側壁面には扶壁が並び、その間にゴシック様式の尖頭形の窓が並んでいる（北側壁面には扶壁はない）。トランセプト交差部の上には方形の鐘塔が載っている。ローヌ地方でよく見かける様式である。最上層には、4面すべてにおいて、上辺にロンバルディア帯が付けられ、その下に半円頭形アーチのアーケードが並ぶ（修復をへて新しい小柱がそのアーケードを支えている）。聖堂の東側の墓地に回ると、ロマネスク期の後陣を目にすることができる。ただし、主後陣にはゴシック様式の尖頭形の窓が開けられている。それはロマネスク様式の後陣には不釣り合いなほど非常に大きな窓である。軒持ち送りに並ぶモディヨン彫刻は、俵を縦に束ねて並べたいわゆる「かんなくず」様のものである。主後陣の向かって左側にはやはりロマネスク期の小後陣が残るが、向かって右側は19世紀に増築された方形の大きな祭室となっている。

聖堂内部は、5ベイからなる主身廊に幅の狭い側廊が南北に付く3廊式である。主身廊と側廊の間は尖頭アーチの連なるアーケードとなっている。主身廊・側廊とともに、横断アーチは半円形で、各ベイには交差ヴォールトが架かる。全体的に19世紀の改修によってきれいに整えられている。トランセプト交差部と後陣部がロマネスク期（11世紀後半～12世紀前半頃）のものである。この交差部が祭壇の置かれた内陣となっていて、身廊部よりも一段高くなった天井は半円筒形ヴォールトで彩色が施されている。ちょうどその上が方形の鐘塔である。この交差部の北東と南東の角のピア柱にそれぞれ2本ずつ付けられた円柱には柱頭彫刻が残されている。北東のものはアカシサスや水葉（feuille d'eau/waterleaf）などの植物彫刻、南東のものには巻き上がる葉の上に人間の顔が見える。半円形平面プランの主後陣には、先にも触れたゴシック様式の大きな窓が開き、聖ペテロと聖パウロのステンドグラス（16世紀）がはめられている。この主後陣の上には半ドームが架かり、部分的にかつての彩色が残っている。主後陣の南北にある小後陣もそれぞれ半円形で、半ドームが載る。北側の小後陣の半



26.1.4. Manthes 西ファサードの彫刻

ドームには、放射状に光を放つ三角形、すなわち「三位一体」の彩色画が残されている。

この小修道院が創建されたクリュニー時代の建物はまったく残っていない。聖堂の南から東側にかけて建っている現在の建物は、15世紀終わりから16世紀初めのルネサンス期のもので、北側と南側に円塔が付けられている。内部の壁や天井、そして柱などに、16世紀終わり頃から17世紀にかけて描かれた彩色画が残されている。ここは私有部分にあたるので通常は見学できないが、しばしばこの地方の芸術家による展覧会などのイベントに利用されている。

Barruol (1992) pp.238-239.; Canal et Joëlle (1984) pp.437-439.; Desaye et Peyrard et al. (1976) pp.99-100.; Ferrier et al. (1989) p.25.; Morel (2007) p.57.: RIP.

26.1.5. ル・グラン=セール／サン=マメール教会

(**Église Saint-Mamert, Le Grand-Serre**)

マントから南東へ直線距離にして約7キロ、シュヴァルの「理想宮」(Palais Idéal)で知られるオートリーヴ(Hauterives)からは県道D51およびD66で東へおよそ6.5キロ、イゼール県境までは2キロである。サン=マメール教会が建っているのは、ル・グラン=セールのコミューンのほぼ中ほどで、このコミューンを東西に貫く県道D66(Grand rue)沿いである。近くには14世紀頃に作られた中世の木組みホール(La halle médiévale)がある。サン=マメール教会は、もともとはヴィエンヌのサン=ピエール修道院傘下のこの地の小修道院付属聖堂として建てられた。史料に初めてその名が現れるのは1025年である。初めサン=ピエール教会と呼ばれ、次にサン=サテュルナン教会に名前を変え、その後現在のサン=マメール教会となった。聖マメール(マメルトウス)は5世紀のヴィエンヌ大司教で、アルル大司教とガリアにおける教会の首座を争ったことで知られる(結局はアルルに譲歩)。現在の聖堂は大部分がルネサンス期以降に再建されたものである(内陣は16世紀、身廊は19世紀)。ロマネスク期のものとして唯一残るのは、鐘塔の下に開くポルタイユのタンパン彫刻である。ポルタイユ自体は13世紀のものであるが、その尖頭形のアーキヴォルトの内側の、さらに四角い枠組み(左右の枠は柱頭彫刻付きの細い円柱が支える)の中に、いわゆる「荘厳のキリスト」がいる。キリストは、アーモンド形のマンドーラに囲まれて、左手に聖書を持ち、右手で世界に祝福を与えながら、左ひざを心持ち高くしてゆったりと座っている。その衣装のヒダが印象的である。ただし、現在このポルタイユにはめ込まれているのはレプリカであって、オリジナルは保管庫に保存されていて残念ながら通

常は見ることができない。

Barruol (1992) p.238.; Desaye (1995) pp.11-13.; Ferrier et al. (1989) p.25.; RIP.

26.1.6. サン=ヴァリエ／サン=ヴァレリー教会 (*Église Saint-Valéry, Saint-Vallier*)

サン=ヴァリエは、ローヌ川沿いにあって、ヴァランスからは国道 N7 を北へ約 27 キロである。サン=ヴァレリー教会は、コミューンの旧市街のほぼ中ほどにあって、ローヌ川からガロール川が分岐してすぐ北側の地区に建っている。聖堂は、もともとは聖エイエンヌ (Saint-Étienne) に捧げられていたが、その後 510 年に没したヴィヴィエ (Viviers) の司教、聖ヴァレリーの名を冠するようになった。最初は 12 世紀の建設によるが、後に幾多の改築をへて、現在はそのほとんどが 16~18 世紀のものである。半円頭形の開口部が 2 つずつ縦に 3 層になって並ぶ鐘塔は 1623 年に建てられたものである。第 2 次大戦の際にも連合軍による空爆の被害を受け、1953 年に修復工事が行われた。ロマネスク期の部分としてわずかに残るのは、五角形の後陣から 2 つめのベイの南北の側壁のみである。外部においては、この部分だけが端正な石積みによるもので、その上方には柱頭彫刻を持つ 3 本の小円柱とそれが受ける 2 つの半円アーチが残されている。中央の小円柱の柱頭彫刻はアカンサスで、向かって右側の半円アーチにはパルメット彫刻が見られる。西ファサードにおいては三角形の破風が頂点に載り、イオニア風の円柱に左右を支えられたポルタリュイが開く。そこから聖堂内部に入ると、横断アーチによって区切られた大きな空間が広がる。2 階席の設けられた西端のベイの天井には円形の天蓋が載り、そこから東側は 4 分交差ヴォールトが続くが、西から 3 つめのベイのみが半円筒形ヴォールトとなっている。内陣ならびに後陣には、ゴシック様式の大きな窓が開き、ステンドグラスがはめられている。

Barruol (1992) p.245.; Ferrier et al. (1989) p.23.; RIP.

26.1.7. ラ=モット=ドゥ=ギャロール／サン=タニエス小修道院付属教会

(*Prieuré Sainte-Agnès, La Motte-de-Galaure*)

ローヌ川沿いのサン=ヴァリエから県道 D51 で西へ約 11 キロ、サン=タニエス小修道院はこのコミューンの北西端の丘の上にある。もとはブルゴーニュのトゥルニュにあるサン=フィリベル修道院傘下のベネディクト派小修道院として 11 世紀前半頃に建設された。史料における初出は 1037 年であり、教皇カリストウス 2 世は、この小

修道院がトゥルニユのサン=フィリベルに所属するものであることを 1119 年の教書の中で確認している（彼はかつてヴィエンヌ大司教であった）。宗教戦争期の 1560 年にはアドレ男爵フランソワ・ドゥ・ボーモンの部隊によって、後陣、身廊の天井、クロワトルが破壊された。それらは 17 世紀になって再建された。1960 年にも大規模な修復工事が行われている。現在の聖堂のうち、ロマネスク期のものとして残るのは、西ファサード、身廊部の壁、トランセプト北翼である。後陣の南北の祭室は 15 世紀のものである。

西ファサードには、2 つの扶壁の間に半円形のアーキヴォルトの載るポルタイユが開く。そのアーキヴォルト自体には装飾はないが、外縁をパルメット彫刻の施されたモールディングによって縁取られている。アーキヴォルトを受ける左右の円柱には植物文様の柱頭彫刻が付いている。このポルタイユの上には、かなり摩耗しているモデルイヨンが並ぶ水平の張り出しがあり（前方に斜めに張り出している）、さらにその上に、モールディングに縁取られた四つ葉の多弁形アーチ（または多葉形アーチ、arc polylobé）とそれ左右で受ける小円柱があり、その内側に半円頭形の窓が開いている。小円柱には図形化された V 字形の植物彫刻が見られる。これらをはさむ 2 つの扶壁の高さもここまでであるが、中ほどの高さのところに、傾斜のある張り出し部分（アーチの起点部）が残っているので、このファサードにはもともとはポーチが付いていたことがうかがわれる。西ファサードの頭頂部は、2 つのベイが並ぶ鐘楼となっている。なおこのファサードの仕様は、ここから南へ約 10 キロにあるシャントメルル=レ=ブレのノートル=ダム教会（Chantemerle-les-Blés [26.1.14.]）のものとよく似ている。

聖堂外部の南側には 15 世紀～17 世紀に増築された祭室が並び、北側には尖頭形アーチの載る隔壁の奥に 17 世紀のクロワトルがある。クロワトルは東面および南面の一部が残されていて、ともに半円形アーチの並ぶアーケードとなっているが、南面に残された 2 つのアーチが、古代風である。

聖堂内部は横断アーチによって区切られた 3 ベイからなる単身廊形式であるが、かつては主身廊の南北に狭い側廊が並ぶ 3 廊式であった。主身廊と側廊を隔ていたアーケード壁は消滅している。身廊の各ベイには 17 世紀の交差ヴォールトが架かり（白



26.1.7. La Motte-de-Galaure

く上塗りされている）、南北それぞれの壁面には、内部に向けて隅切りされたロマネスク期の半円頭形の窓が並んでいる。やはり 17 世紀に再建された後陣（内陣）は、身廊部の東西の中心軸から少し南にずれている。これは現在の内陣（後陣）がロマネスク期のものよりも南側に広げられて再建されたことによるものであり、凱旋アーチの北側の広いスペースは、かつての身廊北側の側廊の名残なのである。後陣の形は方形で、隅切りされた半円頭形の窓が 1 つだけ開いている。天井は 4 分交差リブ・ヴォールトである。この内陣部の北側の左右の角のピア柱にはロマネスク期の柱頭彫刻を持つ円柱が付いている。内陣の北東角のものはアカンサスの植物文様、北西角のものはアカンサスと、その V 字状に広がる葉の中央に人間の丸い顔が彫刻されている。後陣の北側には、その東壁よりもさらに東に延長する形で 15 世紀にサン=タントワヌ礼拝堂（Chapelle Saint-Antoine／葬祭礼拝堂）が、ロマネスク期にあった小後陣のあとに増築された。東壁にはゴシック様式の尖頭形開口部が開き、天井はやはりゴシック様式の 4 分交差リブ・ヴォールトとなっている。内陣の南側には聖処女礼拝堂（Chapelle de la Sainte-Vierge）があり、その祭室の一角に、ロマネスク期のものと思われる円柱が置かれている。これは 4 本の小円柱が燃り束ねられているもので、そのうちの 1 本には花弁のような植物文様の柱頭彫刻が施されている。

Barruol (1992) pp.241-242.; Bornecque (2002) p.33.; Da Costa (2000b) p.26.; Desaye (1995) pp.7-10.; Desaye et Peyrard et al. (1976) pp.101-102.; Ferrier et al. (1989) p.27.; Morel (2007) p.55.; RIP.

26.1.8. クラヴェゾン／サン=タンデオル教会（Église Saint-Andéol, Claveyson）

ラ=モット=ドゥ=ギャロールから県道 D161 を南東へ約 3 キロでクラヴェゾンのコムーヌであるが、サン=タンデオルはさらにそこから細い道を南東におよそ 3 キロ行ったところの集落である。サン=ドナ=シュル=レルバス（Saint-Donna-sur-l'Herbasse）からは県道 D53 で北へ約 6 キロである。

聖アンデオル（聖アンデオルス）は、2 世紀後半から 3 世紀初めにかけての聖人で、最初はスマルナ司教の聖ポリカルポ（Saint-Polycarpe）によって、布教のためガリアの地に送られた。ブルゴーニュの聖ベニーニュとともにマルセイユに上陸している。ヴィヴァレー地方で布教活動に身を捧げるが、セプティミウス=セウェルス帝治下の 208 年 5 月、残酷な処刑によって殉教した。遺骸はローヌ川に投げ込まれたが、対岸で拾われて異教の墓に葬られた。その後 9 世紀に遺骸が発見され、現在のアルデッシ

ュ県ブル＝サン＝タンデオル（Bourg-Saint-Andéol）に棺が置かれるようになった。

ここクラヴェゾンのサン＝タンデオル教会は、12世紀にはマント（Manthes）のサン＝ピエール修道院 [26.1.4.]（クリュニー修道会系）に付属する小修道院聖堂であった。殉教者聖アンデオルの聖遺物の一部を所有していたことから、中世期には数多くの巡礼たちが訪れたという。15世紀半ばにはコルドゥリエ修道会（Cordeliers）がここを所有し、ヴィエンヌ大司教区に属した。16世紀の宗教戦争の時に小修道院自体は破壊され、聖堂は18世紀のフランス革命のうちに売却された。その後は修復が進められ、1984年には歴史的建造物（MH）に指定されている。

サン＝タンデオル教会は、ギャロール渓谷を見渡す高台に建っている。西ファサード、身廊、トランセプトは、15世紀にコルドゥリエ修道会によって改築された後期ゴシック様式であり、もともとのロマネスク期のものはトランセプト交差部の壁、南側祭室、そして後陣部である。頭頂部が三角形の切妻になっている西ファサード（15世紀）は、上下二段構えとなっていて、下段には4段の石段を登ったところに方形のポルタイユ（扉口）が開き、その上には尖頭形の大きなアーキヴォルトが架かる。その3重のヴシュールは外縁をさらにモールディングで縁取られている。方形のポルタイユの上辺に架かる水平のリンテルの中央には、サン＝タンデオルのコルドゥリエ会の紋章（編み紐が3つ並ぶ）が残されている。同様の紋章は、聖堂内部の交差部の天井のリブの要石と、そのリブを受けるキュ・ドウ・ランプにも見ることができる。ファサード上段には大きな丸窓（oculus）が開いている。聖堂南側は墓地となっている。身廊南壁と、さらに身廊南側に張り出た側室には尖頭形の窓が開く。トランセプト南翼に相当する壁には、半円頭形の窓が開くが、そのすぐ隣に、かつてそこに開いていた半円頭形の細長い出入口の跡が残されている。ここにあった小修道院の建物（修道士の居館）との間を行き来するためのものであったと思われる。なお、聖堂の身廊北側の壁には開口部はない。交差部の上に建つ方形の鐘楼は、ヴィエンヌ地方によく見られるもので、東西の面には鐘を吊すアーケードのベイが2つ、南北の面には1つずつ開いている。

聖堂内部は単身廊で、15世紀に改築された身廊は白く上塗りされている。水平に延びるコーニスの上に半円筒形のトンネル・ヴォールトが架かる。ベイは区切られていない。身廊と交差部を隔てる半円形のアーチ壁は、北側が少し張り出すようになっている。これは15世紀の身廊部の改築の影響であろう。交差部の天井は4分交差リブ・ヴォールトで、リブを受けるキュ・ドウ・ランプには、先にも述べたようにコルドゥリエ会の紋章が彫刻されている。半円形平面プランの後陣（内陣）には、大きな石の

祭壇が置かれ、内部に大きく隅切りされたロマネスク様式の半円頭形の窓が3つ並ぶ。水平のコーニスの上には半ドームが載る。この部分は端正な石積みによって作られていて、建設当初のロマネスク期の雰囲気を今によく伝えるものとなっている。

Barruol (1992) p.236.; Desaye et Peyrard et al. (1976) pp.102-103.; Ferrier et al. (1989) p.26.; RIP.

26.1.9. バテルニー／サン=テティエンヌ教会 (Église Saint-Étienne, Bathernay)

バテルニーのコミューンは、サン=ドナ=シュル=レルバス (Saint-Donat-sur-l'Herbasse [26.1.15.]) から県道 D584 を北へ約 8 キロ、県道 D884 が分岐するところにある。サン=テティエンヌ教会は、もとはこの地の城塞礼拝堂で、サン=バルナール=ドゥ=ロマン修道院に属する聖堂であった。建設は 11 世紀末～12 世紀初め頃である（あるいは 10 世紀半ば頃とも言われる）。1481 年～1520 年の間に、アンベール・ドゥ・バテルニー (Imbert de Bathernay、または Imbert de Batarnay) が修復工事を行い、交差部と身廊のヴォールト、鐘塔などを後期ゴシック様式で建て直している。この人物は、1438 年頃この地で生まれ、当時王太子としてドフィネにいた後の国王ルイ 11 世に見いだされ、彼に仕えた。その後、シャルル 8 世、ルイ 12 世、フランソワ 1 世といった歴代のフランス国王の顧問官（もっぱら外交問題など担当）を務めることでその権勢と財力は隆盛を極めた。国王フランソワ 1 世には貸し付けを行っているほどである。孫娘にはディアーヌ・ド・ボワチエ（国王アンリ 2 世の愛妾）がいる。

現在のサン=テティエンヌ教会は、今も述べたように多くの部分が後期ゴシック様式に属するが、後陣の外周を飾るモディヨン装飾と内陣の柱頭彫刻などがロマネスク期のものである。西ファサードには、かなり高い基壇から細い小円柱をへてモールデ



26.1.9. Bathernay 後陣

ィング状のヴュュールが架かるゴシック様式のポルタイユが開く。その上には三つ葉形の窓が付けられているが、その窓を囲むように、古い時代の半円形アーチの名残が残されている（もともとのポルタイユのものか）。屋根は外側においては三角形の木組みのものとなっている。主後陣ならびにその左右にある小後陣は

すべて半円形の平面プランで、ごくわずかに尖頭形となった窓がそれぞれ1つずつ開いている。またそれらの後陣部分の軒持ち送りには、パルメット、花弁、四角い葉飾り、円形や菱形の組紐模様などが、モディヨンとその間のパネルが交互にずらりと並ぶ形で施されている。また南側の小後陣の側壁の持ち送りには、アクロバティックな姿態の小さな人間が何人か彫刻されている。主後陣のさらに上部、方形の鐘塔の下の切妻のコーニスにもパルメットの連続する彫刻が残っているのが認められる。

聖堂内部は度重なる修復（直近では2006年）によって、きれいな状態が維持されている。もとは主身廊の南北に側廊が並ぶ3廊式のプランであったが、現在は南北側廊のかつての西側2つのベイが失われてしまっており、2つの小後陣とその西に続くベイが、あたかも翼廊（トランセプト）のような形になっている。その交差部の上に、方形の鐘塔（ゴシック様式）が建つ。主身廊はこの交差部を含めて4ベイで（各ベイには交差リブ・ヴォールトが架かる）、そこに半円形で半ドームの載る後陣が続く。祭壇の置かれた内陣と主後陣の間にはカーテン画が描かれた尖頭形アーチがあるが、そのアーチの南北すぐ東側に接する形で、基壇の上に立つ円柱が残されている。この2本の円柱にはロマネスク期の柱頭彫刻が載っている。北側のものは、V字状に広がる大きくて生々しいアカンサスあるいは水菓（feuille d'eau/waterleaf）の葉飾りで、南側のそれには、葉飾りに加えて鳥と怪獣のような生き物が彫られている。ともにかつての彩色が残っている。この2本の円柱のさらに東の上部には、それぞれ小さな半円アーチが2つ連なる小アーケード（ともにニッチ）が見られる。

Barruol (1992) pp.233-234.; Ferrier et al. (1989) p.26.: RIP.

26.1.10. サン=クリストフ=エ=ル=ラリ／ル・シャレーのサン=ピエール礼拝堂

(Chapelle Saint-Pierre du Charaix, Saint-Christophe-et-Le-Laris)

サン=クリストフ=エ=ル=ラリのコミューンはル・グラン=セールから県道D66を南におよそ9キロであるが、サン=ピエール礼拝堂が建つル・シャレー地区はコミューンの西端にあたり、北にあるオートリーヴから県道D538を通ってアクセスするのが分かりやすい（約6キロ）。県道D538から分かれて東に500メートルほど入る。聖堂はこのアモー（小村）の、ヴェルコールの美しい丘陵地帯を見渡すなどらかな斜面に建っている。史料における初出は1111年で、ロマン=シュル=イゼールのサン=バナール・コレジアル教会（Collégiale Saint-Barnard de Romans-sur-Isère）に属した。12世紀終わり頃、ル・シャレーから南におよそ4キロにあるモンシュヌーの領主Amédée de

Montchenu がこの聖堂の所有権を主張して、ヴィエンヌ大司教との間に紛争を起こしている。この時は教皇カリクトゥス 2 世の介入によってモンシュヌーの領主が譲歩している。17 世紀になっても、この聖堂の近くにあった小修道院の 10 人ばかりの修道士たちがこの聖堂を使用していたようで、20 世紀半ばまで祭式が執り行われていたが、その後、聖堂の東側にあった墓地とともにうち捨てられ荒廃した。

建物自体はゴシック期の部分が多い。単身廊形式で半円形の後陣には大きくて平べったい扶壁が斜めに付けられている。後陣の南北の面にそれぞれロマネスク様式の半円頭形の大きめな窓が開いている。後陣は南北の幅の広い半円形プランで、身廊部との間に架かっていた凱旋アーチを支える左右両側の側柱がアーチ起点部の高さまで残されている。西壁には方形の鐘塔が建てられている。20 世紀に入ってからの荒廃により、身廊ならびに後陣部の天井はすべて崩落していたが、ドローム県文化財保護協会 (Société de Sauvegarde des Monuments Anciens de la Drôme) の援助もあって 2012 年から修復作業が進められた。その後、後陣部まで木製の屋根が付けられるとともにさらに内部も整備されて、現在ではこの地域の芸術家による展示イベントなどにも利用されるようになっている。

GV; RIP.

26.1.11. ミリベル／サン=セヴェール教会 (Église Saint-Sévère, Miribel)

サン=ドナ=シュル=レルバス(Saint-Donat-sur-l'Herbasse [26.1.15.])から県道 D67 を北東に約 14 キロのところで北に折れ、県道 D513 を 1 キロ少し登るとミリベルの村に至る。県道 D67A をそのまま東進すると、およそ 5 キロでイゼール県との県境である。サン=セヴェール教会は、村のほぼ中ほどの、東側にエルバス渓谷を含めた広い丘陵地帯を見渡す開けたテラスに建っている。1160 年からはロマン=シュル=イゼールのサン=バルナール聖堂参事会の管轄下にあり、ヴィエンヌ大司教区に属した。

聖堂の最も古い部分はトランセプト交差部南壁と鐘塔の基壇部分などで、11 世紀末あるいは 12 世紀初め頃までさかのぼる。西ファサードと身廊の南北の壁の一部、鐘塔の上部などは 12 世紀終わり



26.1.11. Miribel

頃のものである。西ファサードは南北に長く延びる安定感のあるもので、上部は中に大きな丸窓が開く三角形の切妻となっている。ポルタイユは2重の半円形ヴシュールのさらに外側をモールディングによって縁取られたアーキヴォルトが載る。このモールディングには、図形化された連続するアカンサス（あるいはパルメット）彫刻が施されている。タンパン自体には彫刻は見られないが、彩色画の一部が残されている。インポストをへてヴシュールを受けるのは四角い付け柱であり、それはポルタイユの半分くらいの高さまで迫り上がった基壇の上に立っている。タンパンを受ける向かって左側の側柱の上部には、内側に花弁彫刻が1つだけアクセントのように付けられている。ポルタイユの向かってすぐ左側には、13世紀頃のものであると言われるラテン語の碑銘が刻まれた長方形の白大理石が埋め込まれていて、そこには Bernard Rostaing とその妻である Élisabeth の名前が見られる。高さは低いが大きな方形の鐘塔はこのファサードから見て向かって右側奥に建っていて、この聖堂を西から見た際の全体的な印象を非常に均整のとれた安定したものにしている。鐘塔には上部に4面すべてに2つのベイが並ぶ。また鐘塔西面の下には、この鐘塔の下にある礼拝室（chapelle Saint-Joseph）への小さなポルタイユが開いている。初期ロマネスク期の雰囲気を色濃く残したもので、扉の左右には小さな基壇の上に小円柱が立つ。向かって右側のものが古いが、その分摩耗も進んでいる。その小円柱の柱頭彫刻は素朴な植物文様で、角に付けられたアカンサスの葉の間には丸い花弁（あるいは星）が付けられている。この2本の小円柱の上には、色が異なる石の組み合わせからなる半円形の素朴なヴシュールが架かる。

この聖堂の後陣は、もともとは中央の半円形の主後陣の両側にやはり半円形の小後陣が並ぶ形であったが、その後の改築をへて、主後陣はゴシック期の方形のものとなり（東壁には尖頭形の窓が付き、北東角には大きな扶壁が付く）、南側の小後陣もその外側にやはり方形の大きな聖具室（19世紀）が増築されていて、現在ではもともとの半円形の小後陣は外からは見えない。一方、向かって右側（北側）の小後陣は、半円形の平面プランを残している。半円頭形の小さな窓が付いている。

聖堂内部は単身廊形式のラテン十字形である。身廊は南北の幅が広く、交差ヴォールトが架かる。19世紀の改修によって上塗りされている。南東部（南側トランセプトの横）に古い時代の壁が残されている。トランセプトの南翼（chapelle Saint-Joseph）は北翼（chapelle de la Vierge）よりも大きく、その上は鐘塔である。両翼とも東側に半円形の小後陣が続く。尖頭形の凱旋アーチの東に続く主後陣（内陣）は、ロマネスク期の古い半円形のものをゴシック期に方形の平面プランで新たに改築したもので、

天井は4分交差リブ・ヴォールトである。リブは人物が彫刻されたキュ・ドゥ・ランプまで降りている。東壁には尖頭形の窓が開き、ステンドグラス（聖セヴェール）がはめられている。また最近の修復工事によって、一部分ではあるが、彩色されたゴシック期のフレスコ画が復元されている。なお身廊の西端には、二階席（トリビューン）が設けられている。

Barruol (1992) pp.239-240.; Chatel (2001) p.137.; *RIP.*

26.1.12a. クレポル／サン=ロック礼拝堂（Chapelle Saint-Roch, Crépol）

クレポルのコミューンは、サン=ドナ=シュル=レルバス（Saint-Donat-sur-l'Herbasse [26.1.15.]）から県道D67を北東に約10キロ。サン=ロック礼拝堂は、村の中ほどに建つクレポルの新しい教会の広場から左（北）へ折れ、細い道を通ってなだらかな斜面をおよそ1.5キロ登ると、西にヴィヴァレーまで見渡せる眺めの良いヴェルー丘陵の中ほどの斜面に建っている（標高は約400メートル）。ここはもともとは古代の小寺院があった場所であった。1050年の史料にサン=タンドレ礼拝堂の名前で登場するが、19世紀のコレラ禍の際にサン=ロック礼拝堂に名前が変わった。聖ロック（聖ロクス）は14世紀にモンペリエで生まれた聖人で、イタリアのローマなどにおいてペスト患者の施療に尽力したことで知られる。礼拝堂はフランス革命に際して国有財産として売却されたが、ほどなく買い戻され聖務に復した。身廊部は宗教戦争の後、16世紀になって建て替えられた。近年では1955年（屋根）、1979年（鐘楼と後陣の一部）、1995年（身廊部の壁）、1999年（ステンドグラス）、2000年（内部の壁と祭壇）、2012年（西ファサードのポーチと内装）という具合に、それぞれ修復工事が行われて今日まで維持管理されている。

クレポルのサン=ロック礼拝堂は、荒い石積みの小ぶりな聖堂で、長さの短い身廊にロマネスク様式の小さな半円形の後陣が付く。18世紀の鐘楼が身廊と後陣の間に立っている。西ファサードには、木製のポーチ（2012年）の中にポルタイユが開く。中に入ると、外から受ける印象よりも意外に広く感じる。天井は白く上塗りされた半円形のトンネル・ヴォールトで、横断アーチや付け柱の類いはまったくない。両側の壁には、聖ロックの事績を描いた絵画が額縁に入れられて並べられている。身廊部よりはるかに小さい半円形の後陣には、大理石製で彩色された祭壇が置かれ、さらにその祭壇の上には聖ロックの彫像が置かれている。19世紀のもので、聖人の足下にはパンをくわえた犬がいる。

RIP.

26.1.12b. クレポル／旧サン=テティエンヌ教会鐘塔

(Tour-clocher de l'ancienne église Saint-Étienne, Crépol)

クレポルの村からサン=ロック礼拝堂へ登る間道のちょうど中ほどどころにこの村の墓地があり、旧サン=テティエンヌ教会の鐘塔はその墓地の奥に建っている。この旧サン=テティエンヌ教会はロマネスク期に建てられた古いものであったが、19世紀終わりに取り壊されてしまった。その聖堂の南壁の、西ファサードと後陣のちょうど中間あたりにあった鐘塔部分のみが現在まで残っている。塔自体は方形で、南壁には外部および内部に大きく隅切りされた半円頭形の窓が開いている（中ほどの高さのところには小さな縦長の四角い開口部がある）。塔の最上段は4面すべてに鐘を吊すための大きめのベイが開いている。この塔の下は、1482年に領主Jean Bastard de Chasteによって造られたサン=ジャン=バティスト礼拝堂で、内部の壁にはやはり15世紀後半のフレスコ画が残されている。北側に鉄格子のはめられた大きな扁平アーチが開かれていて、そこからこの塔の中を見ることができる。南側（正面）の壁には「受胎告知」が描かれている。聖母マリアの前に大天使ミカエルがひざまずいている。東側の壁の上部には、中央に磔刑のキリストと、その十字架を両手で持ち上げるようにして支える神が描かれている。神は白いローブの上に赤いマントを着ている。その周囲には、音楽を奏でる天使たちがいて、特に向かって左側で笛を吹く天使の姿がはっきりと残っている。この天使たちの回りには小さな星がちりばめられている。西側（向かって右側）の壁には「エッサイの樹」が見られる。その下にある吹き出しのさらに下の人物の厳めしい顔もはっきりと残っている。南壁の上（扁平アーチの真上）には、白い服を着て円錐帽をかぶった二人の女性が向かい合っていて、何か対話をしているように見える。

RIP.



26.1.12b. Crépol 箫を吹く天使

26.1.13. シャントメルル=レ=ブレ／ノートル=ダム教会

(Église Notre-Dame, Chantemerle-les-Blés)

サン=ドナ=シュル=レルバスから県道 D67 と D115 を約 8 キロ西へ行く。ローヌ川からは直線距離にして約 5 キロである。ノートル=ダム教会はシャントメルル=レ=ブレの村を見下ろす小丘の上的一段高くなったテラスに、ファサードを西に向けて建っている。村の中ほどにある Pierre Brenier 広場の西に建つ小さなサント=クロワ礼拝堂 (chapelle Sainte-Croix, 15 世紀) のすぐ脇にある石段を登る。1080 年にル・ピュイの司教であったアデマール (第 1 回十字軍で教皇特使を務めた Adhémar de Monteil) が、この地をノートル=ダム教会を含めてル・ピュイの大聖堂参事会に寄進している。教皇アレクサンドル 3 世の 1164 年の教書、ならびに 1267 年の教皇クレメンス 4 世もそれを確認している。

聖堂の建設は 11 世紀終わり (1090 年頃) から始まった。最初に建てられたのは聖堂東側の半円形の後陣とそこに接続する内陣、そして内陣の南北の方形の祭室、そして鐘塔の下段部分である。その時に木造屋根の身廊も造られたようであるが、12 世紀に入つてすぐ、現在の聖堂の南北の側廊外壁が建てられ、1110 年頃からはヴォールトの架かる新しい身廊とそこに並ぶ柱とアーケードが造られた。最後に西ファサードと鐘塔上部が 1170 年頃に建設された。

聖堂外部を一巡してみると、まず最も建設年代の古い東側の後陣は、半円形平面プランで、半円頭形の窓が 3 つ開いている。その半円形頭部を縁取るように、チェック柄のモールディングが後陣からその左右両側の祭室外壁まで付けられている。またそのモールディングを仕切るように、窓の高さまである細めの扶壁が全部で 4 つ付けられている。後陣の両側の祭室の窓も、同じく半円頭形のロマネスク様式である。後陣のすぐ西側 (すなわち内陣部の上) には、方形の鐘塔が立ち上がるが、それは上下二段構えで、古い時期に建設された下段部分には、西面以外の 3 つの面に半円形の大きな壁アーチが付き、その中にやはり半円頭形の小さな開口部が付いている。上部には 4 面すべてで、2 つ一組となった半円頭アーチのベイが付き、その 2 つベイのアーチはそれぞれ中央において柱頭彫刻 (アカンサス模様であるがかなり摩耗している) を持つ小円柱に支えられている。身廊部の南北の壁には、内陣の南北の祭室の西側に、それぞれ 2 つの扶壁が内部におけるヴォールトの起点部に相当する高さまで付けられている (西端の扶壁は西ファサードの南北の角に放射状に付けられている)。この扶壁の位置は、聖堂内部の側廊の各ベイの間に立ち上がる壁付き柱の位置とは一致しない。聖堂外部からこの南北の壁を見ると、身廊部の扶壁の間に半円頭形の小さな窓が

開いているが、本来聖堂内部の西から 2 番目のベイの南北の側廊壁に開けられるべきであろう窓が付けられていない。この外壁の扶壁の位置は、もともと最初に建てられていた古い身廊のベイの区切り位置の名残であると考えられる。こうしたことからも、後陣と内陣、そしてその南北の祭室と、そこから西側の身廊と側廊の建設年代の間に、わずかではあるが時間的な隔たりがあることがうかがえるのである。

西ファサードは 12 世紀後半（1170 年頃から）の建設による。4 つの扶壁が、水平のモールディングによって上下二段に分かれたファサードの上段にまで立ち上がる（そのうち南北の端の扶壁は、下になるほど手前にせり出している）。方形のポルタイユは中央の 2 つの扶壁の間にあって、聖堂内部に入るためには地面から 8 段の石段を登らなければならない。このポルタイユの上のリンテルには連続するパルメット文様装飾が上下二段になって施されている。半円形のタンパンは開口部となっていたが、最近になって埋められた（無装飾）。ポルタイユの左右には基壇の上に円柱が立ち、その柱頭彫刻と冠板の上に半円形のアキヴォルトが架かる。冠板は新しいが、円柱の柱頭彫刻はロマネスク期の古いもので、左右ともアカンサスが大きく V 字状に葉を広げ、その上に大きくて丸い花弁が付けられている。アキヴォルトは、一番内側のタンパンに半円形の無装飾のヴシュールが接し、その外側に五重となつた半円形のモールディングが重なる。一番外側は、パルメット彫刻の連続する半円形アーチによつて縁取られている。ポルタイユの向かって右側には大きな半円頭形のアルコソリウムが作られている。ファサードを上下に分ける水平のモールディングは、ポルタイユの上（つまり中央の 2 つの扶壁の間）の部分だけ、かなり摩耗しているがパルメット装飾の帶となっている。おそらくかつてはその左右両側も同様の帶であったと思われる。このモールディングの上、すなわちファサードの上段部分には半円頭形の窓が 3 つ並ぶ。そのうち中央のもの（ポルタイユの真上のもの）は、左右を小円柱に挟まれております、その小円柱の柱頭彫刻は、目を見開き、口からトカゲのようなものを吐き出す人面（向かって左）や、やはり目を見開きながら大きな両手で口を押さえる鼻の大きな人面（向かって右）である。ただしこの部分の柱頭彫刻は、この聖堂の他の柱頭と比べると時代的には新しいものであると思われる。この小円柱の柱頭彫刻の上にはインポストを介して、6 つの弁（小円）が連なる多弁形アーチ（多葉形アーチ、arc polylobé）が架かる。ファサードに付けられた扶壁の間に上下二段に並ぶポルタイユと窓、そしてその窓を縁取る多弁形アーチといった仕様は、近くではラ=モット=ドゥ=ギャロールのサン=タニエス小修道院付属教会 [26.1.7.] のそれとよく似ている（ラ=モット=ドゥ=ギャロールでは 4 弁）。また多弁形アーチについては、エトワール=シュル=ロ

ーヌのノートル=ダム教会（北ファサードのポルタイユ）、ヴァランスのサン=タポリネール大聖堂（トランセプトの外壁）、そしてル・ピュイのサン=ミシェル=デギュイユ礼拝堂（ボルタイユ）など、ローヌ地方で時おり見かけるものである。

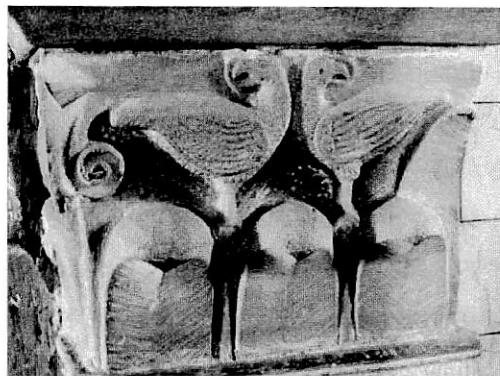
聖堂内部に入ると、高さのある身廊と、ヴォリューム感のあるピア柱（東ね柱）とその上に架かるアーチの列（アーケード）によって隔てられた、やはり高さのある南北の側廊が、その高さの割に狭く感じられる空間に並んでいるのが目に入る。壁や柱は端正に整えられた石積みによって、全体的に非常に美しい印象を受ける。3ベイからなる主身廊の天井は、同じく3ベイからなる南北の側廊とともに半円筒形のトンネル・ヴォールトである。各ベイには横断アーチが架かる。その横断アーチは、主身廊と側廊を隔てる半円アーチのアーケードを形作る方形のピア柱に付けられた柱頭彫刻付きの背の高い円柱が受ける。アーケードのアーチを受けるピア柱にもそれぞれ柱頭彫刻が付く。主身廊のヴォールトの起点に水平に付けられたコーニスのうち、内陣に隣接する最も東のベイの北側のそれはチェック柄の帯、また南側のそれは撚りひも文様となっている（中央のベイの南側コーニスには四角いビエットが並んでいる）。側廊の内壁（外側の壁）には、南北ともに半円形の壁付きアーチが各ベイに付けられている。そのアーチの中には、内側に向けて大きく隅切りされた半円頭形の窓が開く（ただし西から2番目のベイには窓はない）。

主身廊ならびに側廊に立ち上がるピア柱や、横断アーチを受ける壁付き円柱には、さまざまな柱頭彫刻（12世紀）を見ることができる。その数は全部で26である。そのうちピア柱に付けられた12の柱頭は横長の方形、円柱に付けられた14の柱頭は円錐形である。単純素朴なものからかなり洗練されたものまで、多少の質的差異が認められるけれども、その多くが同一の彫刻師あるいは同一のアトリエで作られたものであると考えられている。横断アーチを受ける円柱の柱頭彫刻は、下から上に向けて葉を広げるアカンサスやシンプルな水葉彫刻（feuille d'eau/waterleaf）である。水葉にはその先端に丸い実を付けて並べられたものも見られる。主身廊が内陣に接するベイの東南の角の円柱の柱頭には、アカンサスの葉飾りの上に、逆さまになって落下（？）している裸の人物がいる。その人物の頭の両側では蛇がとぐろを巻いている。西ファ



26.1.13. Chantemerle-lès-Blés

サードの裏側に付けられた方形の付け柱にも不思議な人物がいる。北側の人物は顔だけであるが、ひげを水平に伸ばし、目を見開いて長い垂直の棒にアゴをもたせかけているように見える（人物の顔も含めて、全体が長い杖のような様子を呈している）。頭の上にはアカンサスとV字状の葉飾りを載せている。この付け柱が載る台座には鳥の彫刻が施されている。



26.1.13. 鳥の柱頭彫刻

一方南側には裸の人物がいる（性別は不明）。両腕を頭の横まで持ち上げ、肘を胸に当てている。やはり頭の上には葉を広げる植物彫刻が載っている。両足をゆったりと垂らして、まるで椅子に座っているかのような姿勢である。これはギリシア神話に登場するアトラス神のイメージを表したものであるとも言われる。

身廊のアーケードを形作るピア柱の柱頭彫刻は、長方形のスペースに展開するシンメトリックな構図が多い。やはりアカンサスやパルメット、そして大きめの水葉などが並ぶが、葉飾りの中央に丸い花弁を持つもの、水葉の上に大きくV字状にツルを広げるもの、茎の細いゼンマイがきれいに並ぶもの、またアカンサスの上に羽毛を膨らませて体を丸くする鳥がいるものや、まるで紋章の構図のように2羽の鳥が相対して並ぶもの（体は向き合っているが、頭はお互いに外を向く）、目をパッチリと開いて少し微笑むような表情を浮かべる鼻の大きい人面、などが見られる。また長い尻尾を巻きながら舌を出すライオンのような四足獣、植物を食べるような仕草の動物などの姿も見られる。これらの柱頭彫刻は、プレ・ロマネスクにも通じる非常に古いモチーフを表現したものである。単純な構図であるが、その刻線は明確で力強く、素朴さの中にも純粋な美しさを見るものに感じさせるものとなっている。なお主身廊の東端のベイの北東のピア柱の基壇部分には、これらの柱頭彫刻を制作したと思われる人物の「Ermefredus」という名前が刻まれている。

次に身廊部から内陣・後陣へと目を転ずると、まず身廊部と内陣の間に架かる幅のある凱旋アーチを縁取るようにして、パルメット彫刻の施された石のブロックが半円形に並んでいるのが認められる。この凱旋アーチから東側が内陣となるが、そこには新しい祭壇の上に、黒い聖母子像が置かれている。この黒い聖母子像は、プロヴァンスからヴレイ地方、そしてル・ピュイにまで至るローヌ川流域地方においてしばしば出会うものである。この内陣上には、4隅に扇形のトロンプに支えられる形でドーム

が架かり、その上には方形の鐘塔が建っている。内陣の東は半円形平面の後陣となる。半円頭形の窓が3つ開くが、それ以外には装飾の類いが見られないシンプルな仕様となっている。窓の上には半ドームが載る。この後陣部は、身廊部と比べると著しく高さが低いものとなっている。

シャントメルル＝レ＝ブレのノートル＝ダム教会は、ローヌ川中下流地方の中世ロマネスク期の聖堂様式を今によく伝えるものである。リヨンからプロヴァンス地方に向かう時には、ともするとただ通り過ぎられてしまって顧みられることのないドローム県北部の小聖堂ではあるけれども、時間的余裕があるなら、ぜひとも立ち寄って、その建築的・芸術的価値をあらためて味わうに値する聖堂であると言えよう。

Barruol (1992) pp.144-150, et pp.187-193.; Bornecque (2002) p.36.: Da Costa (2000b) pp.23-25.; Desaye (1992) pp.61-68.; Desaye et Peyrard et al. (1976) pp.104-105.; Ferrier et al. (1989) p.22.; *RIP*.

26.1.14 メルキュロル／サン＝ピエール・ドゥ・マルナス礼拝堂

(*Chapelle Saint-Pierre de Marnas, Mercurol*)

サン＝ピエール・ドゥ・マルナス礼拝堂は、メルキュロルのコミューンの聖堂ではあるが、その北端に位置し、むしろシャントメルル＝レ＝ブレに近い。シャントメルル＝レ＝ブレからは県道 D109 を南へ約 1.5 キロ、県道 D163A と交わる交差点から東に広がる畑の中の農道を 150 メートルほど歩いて登る。聖堂は高速道路をすぐ近くに見下ろす斜面の中ほどに建っている。最初に建設されたのは 10 世紀終わりから 11 世紀初め頃にかけてのこと、1015 年にはロマン＝シュル＝イゼールのサン＝バルナール修道院がここを所有していた。12 世紀にはメルキュロルの領主ギヨームが、この聖堂に関する権益を要求するが、結局はロマンの聖堂参事会に対して譲歩している。18 世紀には東隣のシャノ＝キュルソン (Chanos-Curson) の教区に属した。1792 年に葬祭が行われて以降、この聖堂では儀式が行われなくなってしまった。19 世紀には、この聖堂にもともとあった鐘が、同じくメルキュロルにあったサン＝クレマン礼拝堂（現存せず）の鐘とともに回収され、現在の教区聖堂であるサン＝タンヌ教会の鐘が鋳造されている。20 世紀が進むにつれて建物自体もさらに荒廃が進み、その世紀の終わりには屋根も失われ、壁も崩れるなど完全に廃墟化してしまった。ようやく 1999 年から修復工事が始められ、2000 年から 2007 年にかけて壁が再建され、屋根も新しく架けられた。2008 年には落成し献堂式が行われた。

ローヌへと続く広い丘陵地帯を見下ろす西ファサードは、荒い石積みの壁面に方形のポルタイユが開き、切妻形の塔頂部に小さな鐘楼が載るという、いたってシンプルなものである。新しい鐘が吊された小鐘楼とポルタイユの間には、半円頭形の小さな窓が開けられている。身廊の壁は南北ともに形のさまざまな石（主に丸い石が多い）を積み重ねて漆喰で固めてある。後陣は半円形で、南北と東の3カ所に、内部から外に向けて大きく隅切りされた半円頭形の窓が付けられている。聖堂内部はこれもまたシンプルで、丸い石の積まれた壁面がそのまま残されていて上塗りなどされていないために、荒々しい印象を受ける。小さな単身廊形式で、石の祭壇が置かれた内陣（後陣）は、身廊の床面から1段高くなっている。天井には修復された木造の三角形切妻屋根が載っている。

RIP.

参考文献と略記号

- Barruol, Guy (1992) : *Dauphiné roman*, Saint-Léger-Vauban, Zodiaque.
- Bligny, Bernard, dir. (1973) : *Histoire du Dauphiné*, Toulouse, Éditions Édouard Privat.
- Bois, Michèle et Burgard, Chrystèle (2007) : *Les châteaux de la Drôme*, Grenoble, Éditions le Dauphiné Libéré.
- Bornecque, Robert (2002) : *L'art roman en Dauphiné et Savoie*, Veurey, Éditions Le Dauphiné Libéré.
- Boudon, Jean et Rougier, Henri (1992) : *Histoire du Dauphiné, vol. I, Des pays et des hommes*, Lyon, Éditions Horvath.
- Canal, Alain et Tardieu, Joëlle (1984) : « Drôme. Manthes. prieuré Saint-Pierre », dans *Bulletin Monumental*, tome 142, no.4.
- Chatel, Élisabeth (2001) : « Miribel », dans *La Sauvegarde de l'Art Français*, Cahier 14, Paris, Faton.
- Da Costa, Anne et Fabian (2000a) : *Châteaux de la Drôme*, Châtillon-sur-Chalaronne, Éditions La Taillanderie.
- (2000b) : *Églises romanes de la Drôme*, Châtillon-sur-Chalaronne, Éditions La Taillanderie.
- De Corcelles, Jean-Jacques et Boudon, Jean (1992) : « Les Dauphins, les mystères d'une Origine », dans *Histoire du Dauphiné, Des Pays et des Hommes...*, sous la direction de Jean

- Boudon et Henri Rougier. Lyon, Éditions Horvath.
- Desaye, Henri (1992) : « L'Église Notre-Dame de Chantemerle-les-Blés », dans *Congrès Archéologique de France*. no.150.
- (1995) : « Les trois églises visitées le 25 juin 1995 : La problématique », dans *Études Drômoises*, no.4.
- Desaye, Henri et Peyrard, Maurice, et al. (1976) : *Architecture religieuse dans la Drôme*. Études Drômoises, numéro spécial, L'Association universitaire d'Études Drômoises.
- Dreyfus, Paul (1976) : *Histoire du Dauphiné*, Paris, Hachette.
- Duval, Noël et al. (1995) : *Les premiers monuments chrétiens de la France, tome 1, Sud-Est et Corse*, Paris, Éditions A et J Picard.
- Ferrier, Robert, et al. (1989) : *La Drôme romane*, Taulignan, Plein-Centre Éditions.
- Ferrieux, Claude (2014) : *Petite Histoire de la Drôme*, Valence, Éditions & Régions-La Bouquinerie.
- Mazard, Chantal (1999) : « À l'origine d'une principauté médiévale : le Dauphiné, Xe-XIe siècle. Le temps des châteaux et des seigneurs », dans *Dauphiné France de la principauté indépendante à la Province (XIIe-XVIIIe siècles)*, réunie par Vital Chomel, Grenoble, Presses Universitaires de Grenoble.
- Morel, Jacques (2007) : *Guide des Abbayes et Prieurés en région Rhône-Alpes*, Lyon, Éditions Autre Vue.
- Planchon, Jacques et al. (2010) : *Carte Archéologique de la Gaule, 26, La Drôme*, Académie des Inscriptions et Belles-Lettres, Paris.
- Vaillant, Pierre (1973) : « Les comtes d'Albon et Dauphins de Viennois (1029-1349) », dans *Histoire du Dauphiné*, sous la direction de Bernard Bligny, Toulouse, Éditions Edouard Privat.
- Web-site
La Base Mérimée. (<http://www.culture.gouv.fr/culture/inventai/patrimoine/>)
2017.11.01 アクセス
- GV : Guide de Visite.
- RIP : Renseignements ou Informations sur Place.